

3

ぼうさいかんきょう 防災環境都市・仙台

仙台には、自然に生えている木や花といった自然環境だけではなく、様々な人の手で守り育んできた豊かな環境が広がっています。

仙台市では、この「杜の都・仙台」の豊かな環境を大切にしながら、東日本大震災を経験した教訓を踏まえて、将来の災害や気候変動による危険性に備えるため、防災性を高める「まちづくり」と防災を支える「ひとづくり」を進め、市民生活の安全・安心、快適性を高い水準で保つ都市づくりを進めています。この都市像が「防災環境都市・仙台」です。

震災と復興の経験と教訓を受け継ぎ、市民の「災害文化」を育てるとともに、「第3回国連防災世界会議(2015(平成 27)年3月仙台市で開催)」で培った国内外とのネットワークを生かし、地域・NPO・企業・研究機関などの取組を海外に発信し、世界の防災への貢献に取り組んでいます。



「防災環境都市・仙台」の概念図

▶ ぼうさいかんきょう 防災環境都市・仙台とSDGs

2020(令和2)年7月、仙台市は「『防災環境都市・仙台』の推進」をテーマに「SDGs 未来都市」に選ばれました。防災や環境に優しい持続可能なまちづくりをはじめとして、様々なSDGsの取組を進め、仙台市の取組を国内外に発信しています。



・防災環境まちづくりの例：南蒲生浄化センターの復旧

仙台市の下水の約7割を処理する南蒲生浄化センターは、10mを超える津波により、建物の破壊、機械・電気設備の水没・流出などの被害を受け、処理機能が停止しました。

市民生活に必要な施設であるため、センター内のがれき処理やライフラインの復旧を進めながら、2011(平成23)年9月に新たな復旧方針を決めました。約1年の設計期間の後、10年かかるとされた工事を3年で終えることに成功しました。



復旧後の「南蒲生浄化センター」の様子

・防災環境ひとづくりの例：地域版避難所運営マニュアルの作成

東日本大震災における避難所運営での課題や、実際に運営に携わった地域の方々の意見を踏まえて、女性や障害のある方、外国人への配慮なども取り入れた新たな「避難所運営マニュアル」を作成し、2013(平成25)年度に運用を開始しました。

その上で、それぞれの地域の特徴に応じた避難所運営を進めていくために、町内会などの地域団体や行政、施設の管理者が協力して、避難所ごとに独自の「地域版避難所運営マニュアル」を作成しています。各地域では、こうしたマニュアルに基づいて、日ごろから話し合いや訓練を重ねるなどして、避難所運営に取り組んでいます。



考えよう

自分の住んでいる地域には、どんな取組がありますか。また、家族や地域の一人として、自分にできることは何でしょうか。

• 経験と教訓の伝承等の例：仙台防災未来フォーラム

毎年3月に「仙台防災未来フォーラム」という、仙台や東北で復興や防災・減災に取り組んでいる人々が集まって、それぞれの取組を発表しあい、交流するイベントを開催しています。

このイベントを開催するきっかけは、2015（平成27）年3月に仙台市を会場に開催された、「第3回国連防災世界会議」でした。この会議では、多くの市民の方が復興や防災の取組を発信しており、この“市民による発信”をその時だけのものにしないように「仙台防災未来フォーラム」を継続して開催しています。



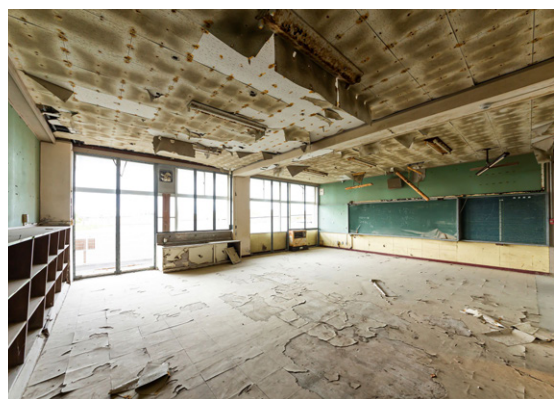
「仙台防災未来フォーラム」の様子

• 経験と教訓の伝承等の例：震災遺構仙台市立荒浜小学校

海から約700m離れたところに位置する荒浜小学校には、震災前、91名の児童が通っていました。津波により校舎2階まで浸水しましたが、屋上に避難した児童や教職員、地域住民320名は、翌日までに全員が無事救出されました。

津波被害の教訓を伝え、つなぎ、将来起こりうる津波による犠牲を少しでも減らすために、荒浜小学校は震災遺構として、2017（平成29）年4月から一般に公開されています。

校舎内部では、壊れた教室や被災直後の写真、当時の状況を振り返る映像などにより、津波の恐ろしさを伝えています。また、被災する前の荒浜地区の歴史や小学校の思い出に関する資料も展示しており、地域の記憶を伝え、つないでいくことに努めています。



「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」の様子

調べよう

他にも仙台市内外では、震災の教訓を発信、継承する取組が行われています。それらの取組を調べたり、実際に訪れたりして、「震災を知る」ことから始めてみよう。